

## 「日々三綱～東京支部発」瀬川徹夫氏（新14回生）映像アワード準グランプリに



優れた映像作品を表彰する映像文化製作者連盟（映文連）の「映文連アワード2024」の準グランプリに、瀬川徹夫氏（新14回生）がプロデュースしたドキュメンタリー映画「おもかげ復元師～続いていくいのちの側の側で～」が選ばれました。

今回の同アワードには合わせて105作品の応募があり、準グランプリとして設けられた3賞（文部科学大臣賞、経済産業大臣賞、優秀作品賞）のうち、見事に文部科学大臣賞に輝いたものです。

グランプリにあたる最優秀作品賞にはNHKエンタープライズなどが制作した「名盤ドキュメント キャンディーズ『年下の男の子』彼女たちのポップ革命」が選ばれました。このグランプリ受賞をみても、第一級の作品と競って、栄えある賞を勝ち取ったことが分かります。表彰式は11月27日午後1時30分から、国立新美術館講堂（東京都港区）で開かれ、翌28、29日には渋谷区内の施設で受賞作品上映会も予定されています。

この作品には瀬川氏のみならず本校卒業生が深くかかわっています。復元納棺師・笹原瑠似子さん（岩手県北上市の納棺業『桜』代表）の活動を描いた同作品は、岩手県宮古市の後藤泌尿器科・皮膚科医院の院長である新8回生の後藤康文氏が瀬川氏に作品づくりを打診し、実現したという経緯があります。

後藤院長は東日本大震災時に被災者を医院に受け入れ、自家発電設備を使って震災翌日から透析治療を施したことで知られています。この命を守る取り組みは瀬川氏により震災ドキュメント「灯り続けた街の明かり～みちのくの医師の信念～」(映文連2014 優秀企画賞受賞)として描かれました。この延長線上にあるのが今回の受賞作品であり、底流には人間の命にどう向き合うべきかという根源的なテーマが流れています。

自然の猛威に抗えないなか、いつ生命の危機に直面するかもしれないのが現代の実像だと言えます。「おもかげ復元師」の選考評では「誰もが予期せぬことで、いつ大切な人を失うかもしれない。そのときに死をどう受け止め、残された人々の生につなげていけばいいのか、改めて考えさせてくれる奥の深い秀逸な映像である」と(要旨)と賛辞を贈っています。

瀬川氏は今回の受賞について「世界的に災害が多発するなか、何か役に立つことができたらと後藤康文氏の思いから、この作品を製作しました。このドキュメンタリーを通して人の死生観について考えていただければと思っています」と話しています。瀬川氏は今年新たに後藤院長の知られざる偉業を描いたドキュメンタリー映画「日中友好の絆～医学に国境はない～」を発表しています。

(文・写真 武田範夫)